

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑬

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

「ダメ。ゼッタイ。」はダメ。ゼッタイ。

1年生で扱うテーマのひとつに薬物乱用防止教育があります。と書くと、もしかしたら「え？薬物乱用防止教育が人権教育？」と思われる方もおられるかもしれません。しかし、わたしの勤務校では薬物乱用防止教育は人権学習として扱うのです。

現在のように「薬物乱用防止教育をください」と言われる前、わたしの勤務校では保健部主催でダルク<sup>(注)</sup>の人を呼んで薬物についての学習をしていました。ただし、当時は回復者を講師にできず、やむなく保護司を講師、回復者はアシスタントという位置づけで話をしてもらっていました。その後、生徒指導部主催に変わり、警察の方を講師に迎えて薬物の恐ろしさを教える「薬物乱用防止教育」になりました。ちなみに、人権教育の担当者であるわたしは生徒指導部に所属していますが、当時のわたしは薬物乱用防止教育にはノータッチでした。ところが、ある時生徒指導部長から「どんな人に話してもらったらいいだろう」という相談を受けました。そこで「かつてダルクの人に来てもらっていた時代もあるから、ダルクの人に話してもらわない？」と提案してみました。すると生徒指導部長はその提案を受け入れてくれました。

実は、これより前に、3年生の人権学習で木津川ダルクの加藤武士さんという方の話を聞いたことがありました。加藤さんの話は、わたしの薬物に対する認識を大きく変えるものでした。加藤さんは現在は日本国籍を取得されていますが、在日韓国人で、シングルマザー家庭で育ちました。加藤さんは在日であるがゆえのさまざまな差別にあわれます。そんな中、在日であることを問題にしなかったのが大麻をやる仲間たちでした。加藤さんは、現実のしんどさから逃げるために大麻をすることになったと言われます。

加藤さんのこの話を聞いたときに思いだしたのは、例えばギャンブル依存回復者のMさんがゲイであり部落出身であること、薬物依存回復者のHさんがトランスジェンダーでありウチナーであること、そして、かつて担任したシンナーにハマってしまった部落出身の

生徒のことでした。もちろん、被差別の立場にある人がみんな薬物をやるわけではありません。しかし、わたしが知っている依存回復者は、みんな被差別の立場にあることに気づいたのです。なぜなんだろうと考えた時に、きっとそこにはヴァルネラビリティ（傷つきやすさ）の問題があると直感しました。だからこそ、被差別者は薬物やギャンブルに近くなる。その時から、わたしにとっての依存の問題は、差別の問題であり人権の問題になりました。同時に、それはそのまま、わたしの勤務校の生徒たちにもつながるものだと思います。だからこそ、薬物を「ダメ。ゼッタイ。」というのではなく、適切な依存の方法を伝えなければならないと考えたのです。

現在、薬物乱用防止教育で来ていただく講師は、薬物依存からの回復を支援する人です。例えば、そのひとりである谷家優子さんは、心理職としての経験から話をして下さいます。谷家さんは、まず「人は何かに依存する生き物」であるとされます。一方、薬物依存者の多くははじめや体罰、性暴力や虐待経験をもっています。薬物への依存は、そうした心の痛みをひとりで抱えている日々の生活の中で、偶然やってきます。つまり、「薬物依存は『孤独の病』である」であり、そのような人が依存から回復するためには、人とのつながりが必要であるとされます。そして「しんどい時にはひとりでがんばらなくてもいいんだよ。『助けて』と言えればいいんだよ」と言われます。

実は、はじめて谷家さんの話を聞いた時、驚きました。谷家さんも、前号で紹介した小林さんも、そしてわたしも、テーマは異なれど、生徒たちに伝えたいことが同じだったからです。それは「助けて」と言える関係をつくることの大切さです。

今年度の薬物乱用防止教育が終わった後の谷家さんのFacebookを見ると、「人権ベースでお話できる稀有な高校なんです」というコメントが書かれていました。それを見て、少し誇らしい気持ちになるとともに、「ようやくここまで来たんだな」と思いました。